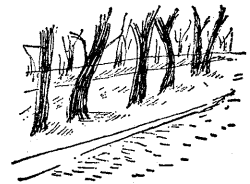


保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十三)



津 守 真

五 歳 児

ここに記してきた子どもたちが、幼稚園の最年長のクラスになった。その最初の週に、附属幼稚園にいったとき、入園したての三歳の子どもたちを見て、私は、この子どもたちが、すでに二年間をここで過ごし、成長しているのを目の前に見た。二年前に、三歳児のクラスに私がいったとき、傍を走ってゆく五歳児を、三

歳児とは異質な世界を形作っているかのよう、大きく感じた。しかし、いま、二年間を過ごし、あのときからそんなにひどく違っていかない、むしろ連続した世界がここにあるように思える。異質に見えた世界が、連続ととらえられるようになるということ、成長の体験に伴う、不思議な現象である。

これから、五歳児にふれた体験をもとにして考えてゆくことになるが、その最初の日に、私は三歳児と交わるようになったので、五歳児と三歳児とを対比して考えてみたい。

四月十九日

朝、庭を歩いてゆくと、五歳児の女児mがとびついてきた。何か面白いことをしゃべりながら、庭の真中まできて、私から離れ、走り去った。

そこに、Sら三人の男児が来て、私の肩や頭の上ののつたが、(私は、瞬間に、三歳のときのことを思い出していた)、すぐにいつてしまった。

私は手持ちぶさたになり、砂場のはしに腰をおろす。男児I、K、Shが、山を作り、トンネルを掘って、何かいろいろやっている。砂場の端に、三歳の男児が、頼りなさそうにこちらを見ているので、私は「ライスカレー」と言って、皿に砂を盛って出した。その子はすぐに受取る。このことから、その子との間に、皿のやりとりがはじまり、次第にその子は元気になってくる。

離れてゆくことと、寄って来ること

五歳児の女児mは、三歳の一学期には、私がゆくと、私の傍を

離れなかった子どもである。だれか他の子どもが寄ってくる、その子を押しつけて、私の手を引いて歩いた。当然のことであるけれども、いまは、私のところにとんできても、すぐに去ってゆく。自分が向ってゆく面白い世界が彼方にあるからである。

私の肩や頭の上に、三人の男児が乗ってきたとき、瞬間に、私は三歳のときの同じような場面を思い出していた。この同じ子どもたちが、室内で、私の上に乗って暴れ、私は放してもらえないで半日を過ごしたことが何度もあった。あまり暴れ方がひどいので、私は周囲を気にすることがしばしばあり、その子どもたちに見つかるのを恐れていた時期もあった。この日、頭や肩の上に乗ってきたのは久しぶりだったが、暴れるのかと思っていたら、すぐに、三人で一緒に走り去った。五歳児には、大人を介せず、自分たちで楽しむ世界がある。

私は手持ちぶさたになる。そんなことは、三歳児の中に入ったときには、あり得ないことであろう。三歳のときに、この子どもたちと遊んでおいてよかったと思う。

砂場の端に腰をおろして、五歳児の砂遊びを見ていると、三歳児のFが、頼りなさそうにこちらを見て立っているのに気が付く。砂場のへりから中に一步を踏み入れることができないでいるのが分るので、私はその子に皿を差し出す。以前にも記したよう

に、差出す行動は、心を差出す行為の行動的側面である。三歳児はすぐにその心を受け取ってくれる。何回も皿の受け渡しをする時、その子の心がこちらに寄りかかってくるのがわかる。そこには、三歳児の柔い感触がある。きょうは、この子と離れることはできないだろうと、私は、内心、覚悟している。

砂場の中では、Iが水をまきながら、「雨だ」という。また、「火山の爆発だ」と言っている。(私は、昨年の今ごろのIを思い出していた。)山の頂上から水を流して、「ダムだ」と言う。「火山が爆発してダムになった」と言う。下の支えのところから、水が横に流れて、流れ出すと、「滝だ」と言う。私が大急ぎで補修しようとする時、「滝だからいいんだ」と言う。途中で三歳児がその山に手をふれると、「やめろよー」と言う。そばにいる子も、三歳児が、いじると、「おまえ、やめろよー」と言う。三歳児が皿を渡すと、じっと見ている、受けとる場面もある。

反復すること

砂場の中では、Iが、山の上から水をまいて、雨だと言い、また、火山の爆発だと言う。また、ダムだと言い、滝だと言う。水がはげしく流れると火山の爆発になるし、水が激しく落ちると、ダムになり、湧きたぎつ滝になる。Iの心の中の激しいエネルギーがここに噴出してみたいである。Iは、昨年の四月に四歳から入園した子どもである。入園した当時のIのことについては、七十六巻十二号に記したように、Iは字を書いて得意になり、先生に承認を求めることが多かった子どもである。形にはまろうとする反面、三角形の形をかいていても、それが火山になって、爆発する図になったりする。

Iは、幼稚園で、自分からしようと思う遊びを大胆にすることができるようになればよいと思っていたが、一年以上たった現在では、ほとんどその目的を達したのではないかと思う。しかし、砂場で、水をまき、火山を爆発させる遊びは、四歳児の一年間を通して、たえず見られたIの遊びである。あるときには、とめないほど水を使って、こちらが不安になるくらいときもあったし、ある時期には、私がいくたびに、この遊びをしているのを見ることがあった。それは、Iが自分の心の中の形を破ってゆこう

とする努力の一過程だったと言つてよいのではないかと思う。今や、Iは、私の見るところでは、戸外でも室内でも、エネルギーにみちて、多様な遊びをする子どもである。このIが、こんなにしばしば、砂山の上に水を流して火山を爆発させる遊びを反復しているのは、どう考えたらよいのであろうか。

同じ類のことを反復するのは、そのことが、継続的に、その子にとって課題になっているからであると思う。Iにとっては、形を作ることと、形を破ることは、四歳のときも、継続した課題なのであろう。それは、あるときには激しく極端にあらわれ、あるときには、違った形で、穏やかにあらわれる。このような、個人の基本的な課題は、もしかしたら、将来も、いろいろの形をとつて、継続してゆくのかもしれない。また、Iが二、三歳だったときに、つき合うことができていたら、この同じことが、もっと素朴な形であらわれるのを見ることができたかもしれないと思う。

三歳と五歳とは、一見、違うように見え、五歳児はおとなびて、大きく見えても、子どもの中には継続している課題がある。

このことは三歳と五歳のみでなく中学生、高校生、あるいは、もっと後年になつても、言えるのではないかと思う。

しばらく、私が五歳児の砂場の相手をしている間に、三歳児Fは見えなくなったが、じきにもどつて来た。ビニールの袋に、花びらをいれていて、私に見せる。庭の地面に、赤くて大きな花びらが、一面に落ちてゐる。私も砂場を出て、花びらを拾う。

Fは、「おしっこ」という。私は急いでFの手をひき、途中から抱きかかえて、三歳児の部屋にゆき、廊下に出て、便所にゆく。

もどつてから、また、花びらを拾う。Fは私の手をひいて、花壇にゆき、チューリップの花の中に、ビニール袋の中の花びらを一枚とり出していれる。並んで咲いている赤いチューリップの花の中に、次々に、花びらを一枚ずついれる。Fは、チューリップの前にかがみこみ、花びらを一枚ずついれる。「チューリップさん」と呼びかけて、ニコと笑う。何回か同様のことをする。私は傍に一緒にしゃがんで見ていたが、暖い春の花壇の中で、心の和むひとときであった。Fは小さいチューリップを見て、「赤ちゃんのチューリップだ、目をつぶっていると大きくなる」といつて、チューリップの前で目をつぶっている。

おしっこを訴えられると、他のことをおいても、大急ぎで、子どもを抱きかかえて連れてゆく。そして、もとのところに戻ってきたときには、その子どもから離れられなくなっている。こうして、三歳児のFとつきあうことになる。

拾う

子どもは、地面に落ちている赤い花びらに目をとめ、かがんで指さきで拾いあげ、ビニールの袋にいれる。落ちているものを拾いあげるのは、その人にとって、それが価値あるものだからである。おとなは見過ごしてしまうものに、子どもは目をとめ、かがんで拾いあげる。

花びら

赤い花びらが一面に散っているのを見ると、美しいと思う。その赤い花びらを、掌に拾い上げると、花びらの厚みやあたたかさを感じるができる。子どもが赤い花びらを手にのせるとき、子どもは赤い色の美しさだけではなく、赤い花びらの感触全体を、親しく感じとっているに違いないと思う。子どもは、生き物を掌にのせたのと同じように、花びらを生きたものとして感じて

いるであろう。拾い上げた花びらは、子ども自身の一部となっている。花びらは、色と形の美しさの故に、おとなは図案模様を作りたい誘惑にかられる。しかし、子どもは、色や形の視覚面からだけこれを見ているのではなさそうである。触觉をもふくめて、その全存在を感じ、一枚の花びらをひとつの生きものとしてふれたいと理解してよいと思う。

花

Fは私の手をひいて花壇にゆき、チューリップの花の中に、花びらを一枚いれる。そして、「チューリップさん」と呼びかけて、ニコと笑う。チューリップの花も、友だちのように、生きた相手として、子どもは向い合っている。花びらは、チューリップさんへの子どものプレゼントである。花の前に、子どもと一緒にしゃがみこんで、花と向い合っていることが全世界である瞬間は、明るく、あたたかくて、静かである。こうして、親しく感じとる花の感触を、子どもはながく忘れることなく、心に留めているであろう。

三歳の子どものように、花と自分だけがすべてであるような世界をもつことができるとき、花は、生きた人間のように、語りかけ、また、語りかけられる存在となるのであろう。子どもにとつては、花は、そのように身近な友たちである。

柳田国男の「母の手毬歌」という文章の中に、「寺と椿の花」という一節がある。木綿の糸をまいて作った手まりをつきながら歌ったといわれる古い歌の一節である。

鎌くうらにまアゐるみイちで

つッばき一本見イつけた

其つッばきだアてのつッばき

御寺へもオててそオだてた

日が照エればすッずみどオころ

あアめが降らればやめどころ

鎌倉に参る道で、椿を一本見つけた。その椿は、伊達な（ぜいたくな）椿で、お寺へ持って行って育てた。日が照れば、涼みどころ、雨が降れば、休みどころ、という意味である。柳田国男の注釈によれば、ここでは、椿の花の美しいのを、いつのまにか人のように取扱っているという。お寺は、昔は、身分のある人の娘

や小さな子の、しばらく預けられている所であった。お寺の庭には珍らしい花や植木も多く、中でも、椿の花は、子どもにとっては、よい遊び相手だった。椿の花は、いかにも伊達で、豪華である。子どもたちは、いまでも、椿の花を拾って遊ぶのが好きである。椿の木の下は、子どもたちにとって、楽しい遊び場である。手まり歌が、椿の花のことを歌うのは、落着いた遊びの楽しい雰囲気の中で、両者が似通っているからであろう。

私が幼いころ、私の家に住んでいて、子どもの世話をよくしてくれた叔母があった。二年ほど前に、八十過ぎで亡くなったが、数年前から、きれいな糸で巻いた毬を作りはじめて、いくつかを私のところに持ってきてくれた。糸で巻いた手毬は、叔母にとっては、懐しさをこめたものであったのかもしれない。私は、まだ幼稚園にもゆかないころのことかと思うが、よく、針仕事をしているその叔母の傍に坐って、糸の切り端をもらったのを覚えている。赤や黄や黒の糸、中でも、絹糸の赤くて細いのがもらえる。とても嬉しい。その窓の外に、小さな庭があって、井戸があり、木があった。糸で巻いた手毬と、庭の木と、それだけの小さな生活範囲の中で、時間の制限もなしにふれた小さなものは、ひとつひとつが、忘れられない感触をもっていて、自分自身の内容を形成しているような気がする。三歳児が花の前にたたずんで、

チューリップさんと呼びかけて、手にもった花びらをあげている姿にふれると、その小さな世界の中の感触を、子どもは、長い間、忘れないのではないかと思うのである。

しかも、三歳児は、自分の世界の傍に、おとなをおいている。もっと大きくなったら、子どもは自分一人で同様のことをしているのかもしれないけれども、おとなにはそれはわからない。三歳児に手をひかれて、ついてゆき、ゆっくりとつきあうと、子どもの世界が私共に伝わってくる。その世界は、子どもにも、おとなにも、たいせつなものではないかと思う。五歳児になると、自分たちの世界を求めて走り去ってしまう。生活範囲が広がってゆくことは、成長に伴う自然のことであるけれども、それだけに、生活範囲がまだ小さい時期には、その世界でしか得られない感触を十分に味わっておくのがよいのだと思う。これが人間の底辺を作るのであると思う。

Fは、花壇から離れて、ジャングルジムにのぼる。じきに帰る時間になる。Fは呼ばれても、「カエラナイ」といって動かない。

私は肩車をして部屋にいった。部屋で、下におろすと、「カエラナイ」といって、すぐに、庭に走り出て、ジャングルジムにもどる。私はまた追いかけて迎えにゆく。こんどは、ひこうきで帰ろうといつて、ひこうきのように、両手で支えて、庭をひとめぐりしてから、部屋にもどる。五歳児には、もはや、こういうことはない。もっと物分りがよく、社会節度がある。三歳児もじきにこくなるのであるが、三歳のときには、三歳なりの生活が充実することがたいせつなのだと思う。それぞれの時期が充実しているときに、それは成長の途中の未熟な段階として意味をもつのでなく、その時期としての成熟があるのだと思う。

(つづく)

